

主 題：備えなさい。キリストが来られる。
聖書箇所：マタイの福音書 25章1-13節

私たちは昨年も様々な自然災害を経験しました。ですから、いろんなところで、特に、私たちが耳にするのは、観光名所において災害のための準備が為されていることです。耐震構造を見直してみるなどよく聞きます。備えなければいけないということです。主ご自身も私たちひとり一人に対して備えをするようにと命じておられます。今日、私たちはマタイの福音書25章、そして、24章を通して、「備えなさい」と警告しておられる神のメッセージをごいっしょに見ていきたいと思えます。

皆さんに想像していただきたいのですが、主イエス・キリストは弟子たちとともにエルサレムの神殿におられました。この神殿は、シオンの山頂にある約300m四方の平地の上に建てられたものでした。白い大理石で建てられて神殿の周囲にあるソロモンの廊、また、王室の廊を支えたのは、高さ11m、厚さは三人の男が手をつないでやっと届くほどの一枚岩であったと、そのように言われています。神殿跡から発見された石は長さが6~12m、重さが100屯もあるようなものでした。大変すごい、驚くような神殿が建っていたのです。現在、そこにはイスラム教のモスクが建てられていますが、その場所にあった神殿、そこに主は弟子たちとともにおられたのです。その神殿を見て弟子が驚嘆を込めて「先生。これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう。」(マルコ13:1)と言ったのも無理はありません。

その当時の様子はマタイ24章に記されています。そのように語った弟子に対してイエス・キリストは24:2を見ると「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」と言われ、別の福音書では「この大きな建物を見ているのですか。」(マルコ13:2)と書かれています。いずれにせよ、驚くばかりの神殿を見ていた弟子たちにイエスは「この神殿のすべては必ず崩壊する」ということを預言されたのです。弟子たちは信じられませんでした。でも、実際に、私たちは歴史から紀元70年にこの神殿がローマによって破壊されたことを知っています。

恐らく、イエスはこのことを話された後、彼らは東にあるオリーブ山へと向かっていくのですが、その道中、弟子たちは話し合ったことでしょう。「イエスさまが言われたことはどういう意味なんだろう？あの神殿が壊れるとはどういうことなんだろう？いつのことを言われているのだろうか？」と。そこで、オリーブに移動した彼らはイエスの許にやって来てその真意を問おうとするのです。そのことが24:3に記されています。「イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。」、弟子たちは知りたかったのです。イエスが言われたことはどういうことなのだろうか？いったいこれから何が起こって来るのだろうか？と。そこで彼らは「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょう。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」と、これが弟子たちがイエスに問うた質問でした。というのは、ユダヤ人たちはこのような神の預言を熟知していたのです。旧約聖書からそのことを教えられていた彼らは、いったいそれがいつ起こるのか？その前にどのような前兆があるのか？どのようなしるしが伴うのか？そのことを尋ねるのです。

それでイエスは「どのような前兆があるのか」を話されるのです。その教えがマタイ24、25章に書かれている主イエス・キリストの「オリーブ山でのメッセージ」です。どんなことが書かれているのか？今、多くの時間を費やすことはできませんが、簡単に、主がお答えになった「世の終わりの前兆」に関して、七つのことを見ていきます。世の終わりの前に、イエス・キリストの再臨の前にこのようなことが起こるといことです。

◎世の終わりの前兆

1. 偽キリストの出現による惑わし 4-5節

24:4-5「:4そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。:5わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。」

1) 彼らの出現：「自分こそが救世主だ」「自分こそが救い主だ」と名乗る者がたくさん現れて人々を惑わすということです。これは、どの時代にも起こったことです。旧約の時代を見ても、イスラエルの中にもそのような人たちが現れました。実際に、2000年前のイエス・キリストの時代においても、そのような人たちが多く現れていたことが聖書の中に記されています。ペテロは「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。」(Ⅱペテロ2:1)と旧約のことを言います。イスラエルの歴史

の中には多くのにせ預言者が出現しました。「自分こそが神のメッセージを語る者だ」と。実は、そうではな

い、偽りのメッセージを語る者でした。2：1には続いて「…同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現れるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、」とあり、イエスの時代にも多くのにせ預言者が教会の中に入り込んで来て、「これが神のメッセージだ！」と言って、実は、異端を持ち込んでいたのです。

2) **彼らのもたらす弊害**： 彼らの影響は異端によって人々が神の真理から外れていくことだけではありません。彼らもたらしたのは彼ら自身の不道德な生き方です。Ⅱペテロ2：2-3にそのことが記されています。「2 そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。3 また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行われており、彼らが滅ぼされないままではいることはありません。」

(1) **不道德を持ち込む** = 「2 そして、多くの者が彼らの好色にならい、」と、偽りの教師たちの好色に倣っているのです。つまり、彼らは異端だけでなく不道德をも持ち込んでいるのです。

・「好色」とは「不道德、ふしだらな行動、習慣的な性的不道德、異性への性的誘惑」という意味をもったことばです。このような不道德な生き方を彼らは実践していただけでなく、その生き方があたかも正しいとして教会の中に持ち込んで来るのです。それによって多くの人たちがそれに巻き込まれていくのです。

・「ならい」とは、その生き方を見た多くの人たちがこのにせ教師たちの教えに「従う」ことです。

(2) **不道德がもたらす結果** = 「そのために真理の道がそしりを受ける」と、神に従って行くことを非難される、悪口を言われる、罵られるのです。

このようなことが今から2000年前のイエスの時代、そして、その後の時代にも起こったのです。イエスがマタイ24章で弟子たちに話されたとき、歴史上、様々な罪が横行し、神に逆らい続けた人々、社会、時代がありました。イエスは「世の終わりにはそれらの悪がもっと増大する」と言われました。これまで人間が見たこともないような不道德が横行するということをイエスはここで話されたのです。

ノアの時代、創世記6：5「【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」

アブラハムの時代、ソドムとゴモラの罪、創世記18：20「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。」

士師の時代、士師記21：25「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた。」

これらよりも酷い時代になるということです。

私たちがひとつ覚えておかなければいけないことは、なぜ、ソドムとゴモラもそれ以外の町も滅んだのか？その理由は「罪」であったことは明らかですが、どんな罪だったのか？そのことです。聖書は明確に私たちに教えています。たとえば、ソドムとゴモラの罪についてユダ7節に「また、ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています。」、つまり、その当時の人たちがどのような生活をしていたのかが聖書によって教えられるのです。ここにあるように「不自然な肉欲」と、これは同性愛や様々な性的な罪のことです。私たちは何度もみことばを見て来たように、そのような人たちに神のさばきが下ったことを知っています。今の私たちの社会を見たとき、そのようなものを容認する動きになっています。今、私はこうして皆さんの前でこのように話していますが、このようなことが講壇から語れない状況が今の世の中に存在しているのです。このように語る事が「それは差別だ！」と非難されます。

私たちが何があっても神のことばを伝えなければなりません。それが責任であるから…。誤解してはならないことは、そのような人々を憎んでいるのではないということです。かなり前のことですが、かつて私はグレイハウンドというバスでテキサス州を移動しているときに、私の隣にひとりの白人の方が座りました。話をしているうちに彼は宣教師だと言い私も宣教師だということになり話は盛り上がったのですが、その後話を聞いていると、彼は同性愛者だということが分かり「どう思いますか？」と言われたので私は「私たちはみな罪人であってイエス・キリストによる救いが必要です」と答えました。彼はそれを聞いて非常に感動されたのです。

私たちはみな神に逆らう罪人でした。自分の好き勝手な道を生きていたのです。神の教えに全く背を向けていました。神にさばかれて当然でした。でも、神はあわれみをもって我々を救ってくださった。私の知人の中にも友人の中にも、同性愛の中にいたけれどイエス・キリストを信じて全く新しい生活をしている人たちがいます。みことばが罪だと言っていることは罪なのです。私たちはそのような人たち

のために祈り、その人たちに一番必要な罪の救いを語り続けていくのです。でも、今の社会はそういうことに対してあたかもそれは彼らに対する差別であるかのように見る動きがあります。つい先日も話したように、隣の高石市において性的マイノリティの人権のために制服を選べるようになったということ。

女性だからセーラー服で男性だからズボンでと、そうではなくて生徒が選べるように配慮がなされたというのです。こういう社会になって来ているのです。

聖書のみことばを見るなら、なぜ、神がこれまでさばきを下して来られたのか、それは罪が原因です。そして、このソドムとゴモラについても、明らかに、それが同性愛という罪が原因でこの町が滅んだことが書かれています。ユダの手紙1：7「また、ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています。」、ですから、今の世の中を見ると、罪に対して益々寛容になって来ています。社会はそういうものを受け入れるようになって来て、それらをさばいたりすると逆に問題だと言って問われるのです。イエスが言われたことは、今、私たちが見ているどんな罪よりもどんなに墮落した社会よりも、世の終わりの社会はもっと酷いことになるということです。その理由は、Ⅱテサロニケ2：6-7「6 あなたがたが知っているとおりに、彼がその定められた時に現れるようにと、いま引き止めているものがあるのです。：7 不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。」と、聖霊なる神の働きがあるからです。今、この社会が崖を下って行かないように、転げ落ちて行かないように聖霊が留めていると言うのです。でも、その聖霊が除かれたときに、つまり、この働きを中止したときにこの社会は今まで私たちが見たこともないような社会になるのです。そのことをこの聖書の箇所は教えるのです。ですから、まず初めに、イエスが兆候として教えられたことは、私たちが見たこともない社会になる、不道德の極みというそのような社会になるということを一目に警告されたのです。

2. 民族間の争いの増加 6-7 a 節

6-7 a 節「：6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。：7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、…」、イギリスの国際戦略研究所は9日、世界全体での武力紛争に関する調査報告を発表しました。そのデータによると、紛争による2016年の死者数は15万7千人で前年に比べて1万人減少した。紛争によって移住や避難を余儀なくされる住民は増加傾向にあり、昨年1～8月にシリアで90万人、イラクやアフガニスタンでもそれぞれ20万人以上が国内避難民となったと、これは日経新聞の記事として挙がっています（日経新聞2017/5/9）。私たちはニュースを見て様々な所で争いが起こっていることを知っています。今現在でも25の国で紛争が継続していると言います。ヨーロッパでも、アフリカ、北米、中近東でも、そして、私たちのアジアにおいてもです。

3. 自然災害の増加 7 b-8 節

三つ目の兆候として挙がっているのは「自然災害の増加」です。7 b-8 節「…方々にききんと地震が起こります。：8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。」、私たちはもう地震が起こっても驚かないようになって来ました。テレビでは頻繁にどこどこで地震が起こったと速報が流れます。気象庁のまとめによると、2018年1年間に国内で発生した震度1以上の地震は2179回のぼり、前年に比べて154回多いことが分かった。そのうち震度5以上の地震は計11回あったと言います。つい最近も、熊本で大きな地震がありました。世界的に地震や様々な災害が増えていることを、今生きている私たちは切実に感じているはずです。

4. クリスマンへの迫害 9 節

9 節「そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。」、確かに、「クリスマンの歴史は迫害の歴史だ」と言った人がいます。どの時代においてもクリスマンたちはいろんな迫害を経験して来ました。私たちのこの日本でもそうです。イエスが言われたことは、世の終わりになれば今まで経験したことのないような迫害がクリスマンに及ぶということです。

そこで私たちがしっかりと覚えておかなければいけないことは、そのクリスマンたちにあなたは含んでいないということです。というのは、クリスマンたちに対する迫害が起こる前にあなたは神のもとに引き上げられているからです。今、私たちが見ているのはイエス・キリストの再臨のことです。地上への再臨、世の終わりのことです。その地上にイエスが帰って来られる7年前に、空中にイエス・キリストが帰って来られるという空中携挙のことが聖書の中に記されています。その時点で、地上にいるすべてのクリスマンたちはいなくなります。でも、その7年の間に、すでに黙示録で学んだように、

イエス・キリストを信じて救いに与る人たちが今と同じように起こされていきます。彼らに対する迫害のことがここで言われていることです。

5. 人間間の憎しみが増大 10-13節

人々の間の憎しみが大きくなるということです。10-13節「:10 また、そのときは、人々が大ぜいつまり、互いに裏切り、憎み合います。:11 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。:12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。:13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」と、

大変な時代になるのです。私たちはこれからの将来を見るときにすばらしい世界が待っているように、そのように願っています。でも、聖書が言うのは「大変な世界が待っている」ということです。人々の愛が益々冷え切って、人のことなどどうでも良いと、互いの間に憎悪感が存在するような、そんな社会になっていくということをイエス・キリストは弟子たちに教えたのです。

6. 世界宣教の成就 14節

14節「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」と、終わりの日が来る前に、主イエス・キリストが地上に帰って来られる前に、神のさばきが出る前に、このすばらしいイエス・キリストの福音が全世界に届くということです。今はまだ全世界に届いていません。でも、その時にはすべての人々がこのイエス・キリストの福音を耳にするということです。

7. エルサレムの危機 15-28節

15-28節に、エルサレムが敵によって囲まれて滅んでいくということが記されています。

このようなことが起こったなら、イエス・キリストが地上に帰って来られるその日がもうそこに近づいていることに気付きなさいと教えているのです。

8. キリストの再臨 29-31節

ですから、この24:29-31はイエス・キリストが地上に帰って来られるとき、再臨のことです。

どんな兆候があるのか？偽キリストが現れること、そして、人々を惑わすこと、また、民族間の争いが増し、自然災害が増し、そして、クリスチャンへの大変な迫害が起こること、人間間の憎しみが増すこと、世界宣教が成就すること、そして、エルサレムに危機が訪れること、このようなことが主によって語られたとこの24章に書かれています。

これから本題に入っていきます。

9. たとえによる説明 32-51節

ここからイエスは「たとえ」を使って話をされます。「たとえ」とは寓話、つまり、聞いている者たちに分かり易い話を使って真理を説明し、理解を助けるものです。主は、弟子たちが知りたかった「世の終わり」、「主の再臨」、「主の日」についての真理を彼らが正しく理解するために「たとえ」を話されました。そして、来たる「主の日」にどのように備えるべきかを教えられたのです。

32節には「いちじくの木から、たとえを学びなさい。」とあり、45節には「主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは、いったいだれでしょう。」とあります。そして、25章にもたとえは続いていきます。

◎二つのたとえ

1) 「いちじくの木」のたとえ 32-44節

みながよく知っている「いちじくの木」のことを「たとえ」として使うのです。言っていることは簡単です。32節「…枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。」と、みな分かっているでしょう？あなたがたがいちじくの木を見て季節が明らかになるように、このような兆候をあなたがたが見たなら、主の帰って来られる日、世の終わりが近いことに気付きなさいと言われたのです。ですから、「備えない」ということを繰り返して話されるのです。そうでなければ大変なことになると言います。40-41節を見てください。「:40 そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひたひたは残されます。:41 ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひたひたは残されます。」とあります。備えをしていないならこのようなことになるということをイエスは話されたのです。

でも、具体的にこれが何を意味するのかまだ分かりません。それはこの後明らかになっていきます。まず、皆さんに覚えていただきたいのは、イエスはこのたとえをもって「終わりの日が近い」、このような兆候が現われたら、終わりの日、神のさばきが出る日、それを「主の日」と言いますが、その日が近いということに気付きなさいということと言われたことです。その日の備えをしていないと、畑に二人いる内の一人は取られ一人は残される、臼をひいている二人の内の一人は取られ一人は残されることになる、「だから、目を覚ましていなさい。」(42節)と言われ、44節にも「だから、あなたがたも用心

していません。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」と、このような警告が記されているのです。「備えなさい」と、それが主が言われていることです。

2) 「忠実な賢いしもべ」のたとえ 45-51節

もう一つのたとえが45節から記されています。主人に忠実であった者は祝福をいただいたが、主人に対して不忠実であった者はさばきを受けたということです。

この24章を通して、主は二種類の人がいるということを明らかにされたのです。畑に残される人と取られる人、臼をひいていると取られていなくなってしまう人とそこに残される人。また、主人からいただいた務めに忠実であったので祝福をいただいた人と、不忠実であったのでさばかれた人、このように二種類の人がいるということ、それがこの24章のたとえの中で主が教えられたことです。

それを踏まえた上で、今日のテキストである25章を見てください。25:1「そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。」と、これもたとえです。

というのは、このたとえが言わんとすることを読者たちがよく理解したからです。このようにしてユダヤ人たちは結婚式を迎えたのです。花婿が花嫁の家に花嫁を迎えにやってきました。そして、そのあと披露宴が開かれるのです。その話を主はここでたとえとしてお使いになったのです。ある真理を弟子たちに教えようとしたのです。その真理とは「備えなさい」ということです。

ここで「天の御国は」とあります。御国とは「王である主が治めている所」です。つまり「天国」のことです。そして、「花婿」とは主イエス・キリストのこと、「花嫁」とは「救われている人たち」のこと、「見えない教会」を指します。

◎10人の娘たちとは…

1. 二種類の娘たち

二種類の娘たちが存在しているのですが、彼女たちに共通している点があります。10人とも花婿が来ることを待っていることです。つまり、彼らには聖書的な知識があったのです。同時に、10人とも「ともしびを持って」と同じことをしています。みなが救いに与っているように見えます。ところが実は「そうではないのだ」というのがここでイエスがお教えになっていることです。

「賢い娘たち」と「愚かな娘たち」と、5人と5人に分かれています。この娘たちの間で何が違っていたのか？「油」を用意していたかどうかです。2-4節「:2 そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。:3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。」と、この「ともしび」とは、恐らく、長い木に布を巻き付けてそれに油を込み込ませてそこに火をつけたもので「たいまつ」として使います。賢い娘たちは油を用意していたのです。愚かな娘たちは油を用意していませんでした。:4 賢い娘たちは、自分のともしびと一しょに、入れ物に油を入れて持っていた。」、これが違うのです。油を持っていたか持っていなかったかです。この「油」とは何のことでしょう？たとえです。何を言わんとしているのか？これは「聖霊なる神」のことです。また救いにおける聖霊なる神のみわざを象徴しています。それはまた後で説明します。

この二人の娘たちを見ると、5-12節「:5 花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。:6 ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ』と叫ぶ声が出た。:7 娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。:8 ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』:9 しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』:10 そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼と一しょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。:11 そのあとで、ほかの娘たちも来て。『ご主人さま、ご主人さま。あけてください』と言った。:12 しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません』と言った。」と、これがイエスがお話しになった「たとえ」です。

油を用意していなかった5人の娘たちは実際に油を買いに行きます。戻って来た時には戸が閉じられていてその中に入ることができなかつた。祝福の中に入ることができなかつたのです。

衝撃的なことは「どうか開けてください」と言った時に、主人が彼らに何と答えたのか？「確かなところ、私はあなたがたを知りません。」でした。どういう意味かお分かりでしょうか？同じような答えが、実はマタイの7章に記されています。マタイ7:21-23「:21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。:22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』と、つまり、多くの人々が神に対して「神さま、私たちはこれこれのことを行って来たではありませんか」と言いま

す。でも、そのときに主が言われたことは「:23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」です。

なぜ、「わたしはあなたのことを知らない」と言われたのでしょうか？これは知識のことを話しているわけではありません。神との個人的な関係のことを言っているのです。イエスは「あなたとわたしには個人的な関係がある」です。このマタイの7章に記されている人たちは「私たちはこれこれのことをやった、悪霊を追い出した、奇蹟を行った。」と言います。でも、主が言われたのは「わたしはあなたを知らない。あなたはわたしを個人的に受け入れていないから。」です。もっと言えば「あなたは救いに与っていない」と言われたのです。

同じ表現がここに記されているのです。この5人の娘たちに対して「私はあなたがたを知りません。」と。皆さん、このたとえでイエスがお話しになったことは、主が帰って来られたときに、救われていると思っていた人たちの中に実は救われていなかった者たちがいるということです。確かに、この人たちの中に知識はありました。聖書の教えにある面通じていたのかもしれませんが。でも問題は、どれだけのことを知っているかではありません。イエス・キリストを個人的に知っているかどうかです。問題は罪が赦されているかどうかということです。イエス・キリストが救い主であるとか、イエスが神であるとか、そのような知識を持っていても、そのイエス・キリストがあなた自身の救い主でなければ、あなたもこの愚かな娘たちと同じだということです。

このたとえをもってイエスが教えられたことは、主が帰って来られたときに、ある人たちは何も考えていなかった、備えが出来ていなかったということです。油がなかったのです。聖霊なる神をいただいてなかったのです。つまり、救いに与っていなかったということです。そして悲しいことに、救いのチャンスを逃したのです。残念ながら、そのような人たちがたくさんいることを聖書は私たちに教えています。イエス・キリストの救いのことを聞いても、多くの人は自分の意志をもってその救いを拒み続けるのです。ある人は教会に繋がっているかもしれない。ある人は教会に来て熱心かもしれない。問題は、あなたがどれほど熱心かではなくて、あなたはイエス・キリストを個人的に信じ、救いに与っているかどうかです。今日死んでもあなたは神のもとに上がることができるか？永遠を神とともに過ごせるかどうか？ということです。

実際に、教会の中には二種類の人がいるということを主ご自身がお話しになっています。マタイの福音書13章にイエスによる別のたとえがあります。13:24-30「:24 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。

:25 ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。:26 麦が芽ばえ、やがて実ったとき、毒麦も現れた。:27 それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』:28 主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』:29 だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。:30 だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。』」、最後まで待ちなさい、最後のさばきのときに私がそれらを二つ分けるからと言います。このたとえも私たちに教えていることは、目に見える教会の中にクリスチャンだと自分で信じているが、実はそうでない人たちがいるということです。だから、警告されているのです。主が帰って来たときに、その人たちは自分が望んでいたような祝福に与らないのです。永遠の滅びに至るのです。だから、備えていなさい。「主の日」来るのだからさばきが来るのだから、そのために備えておかなければならないと言うのです。

マタイ24章に戻って、もう一つの別のたとえがあります。

2. 二種類のしもべたち マタイ25:14-30

これは「主人から託された責任を忠実に果たす人」と「不忠実な人」との違いです。ここにも二種類の「しもべ」のことが記されています。14-30節「:14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。:15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。:16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。:17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。:18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。:19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。:20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』:21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びとともに喜んでくれ。』:22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧

ください。さらに二タラントもうけました。』：23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びとともに喜んでくれ。』：24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。』：25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』：26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。』：27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。』：28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』：29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。』：30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ざしりするのです。』。

皆さん、このたとえで大切なことは、何タラントいただいたかではなく、5タラントも2タラントも1タラントも神はそれぞれにふさわしく与えます。なぜなら、いただいたものを用いるためだからです。ひとり一人に、その力量を越えたものを神はお与えになりません。ですから、自分は1タラントしかなかったとそんなことで失望するのではなく、与えられたものをどのように用いるかどうかです。なぜなら、みな例外なく霊的賜物を与えられているからです。神はあなたの力量に合ったものを与えてくださるのです。このたとえの中で、その賜物、与えられたタラントをしっかりと用いた人は主から祝福をいただきました。21節、23節に『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びとともに喜んでくれ。』と、「忠実なしもべ」だと言っていただけなのです。

では、考えなければいけないのは1タラント預かったしもべのことです。彼に対して主人は何と言われているか？25：30「役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ざしりするのです。」と、先に見た24章の51節にも不忠実なしもべに対して「そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。」と言われました。

「泣いて歯ざしりする」ということばが繰り返されています。実は、このことばは新約聖書の中に7回出て来ています。6回はマタイの福音書です。1回だけルカの福音書13：28に出て来ます。この表現が意味するのは「永遠のさばき」のことです。「すべての救われていない者へのさばき」、永遠の地獄で人々が苦しむ様子を表わしているのです。

そうすると皆さん、イエスはお語りになったこのたとえをもって私たちに何をお教えになったのでしょうか？最初に見たのは聖霊をいただいていない人、油の備えのない人は救われていない人だと見ました。では、この主に対して忠実でない人はどうですか？油を持っていない人、聖霊をいただいていない人は、どんなにクリスチャンらしく振る舞っていても救いに与っていない人です。そして、この2種類のしもべについてのたとえを見た時に、不忠実なしもべに対して主人が告げられている内容は「永遠のさばき」です。主に対して忠実でない人も実は「救いに与っていない」ということです。

救われていると思い込んでいる未信者に対して「あなたは備えていないと救いを逃してしまう。だから、目を覚ましていなさい。」と言われるのです。24：42、25：13「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」と。あたかもイエスは「あなたの救いは大丈夫か？本当に罪の赦しをいただいているのか？それとも、あなたはただ自分が救われていると思い込んでいるだけで、主はあなたに対して『わたしはあなたを知らない』と言われるような存在ではないか？」と問うているようです。

聖霊なる神をいただいていないなら、どんなにあなたが教会で熱心でも、どれほど奉仕をしても、あなたは永遠の滅びに行きます。それが神のメッセージなのです。なぜなら、あなたは備えていないか

らです。そして、忠実でない人々、恐らく、多くの人たちはそのたとえを聞いて動揺したと思います。なぜなら、「私は本当にすべてにおいて忠実です」と言える人がどれほどいることか？それが現実だからです。でも少なくとも、救いに与った者たちは、主に対して忠実でありたいと願っていませんか？主が与えてくださった賜物を使って何とか神に仕えて行きたいと、そんな願いがありませんか？少しでも神が喜んでくださることを行っていきたい、そんな思いがありませんか？もし、そのような思いが全くないのなら、その人はその救い自体を考えなければいけないでしょう。

私たちは学んで来たように救いというのは神からのギフトだからです。神が救ってくださる、神が造り変えてくださるのです。どんな人に？主に仕えて行く人にです。主は私たちが礼拝者として生まれ変わらせてくださった。だから、どんなときでも主を崇めながら主を称えながら主に従っていく、そうい

う人へと造り変えてくださる、これが救いなのです。「天国に行きたいから私は生活を変えません。天国行きの切符をください。」、これは救いではありません。その証拠にその人の生活は変わらないからです。だから、その人が救われていると言っても、神に従っていかうとしない、神の命令に従おうとしない、みことばに従っていかうとしないなら、それはなぜか？救われていないからです。でも、救いに与っているなら、少なくとも、あなたのうちには「主のみことばに従って生きたい！」というその思いがあるはずですが、でも、罪が邪魔をするのです。そのように歩まないようにと「あなたが考えているように生きることもすばらしいよ。あなたが思うように生きることもすばらしいよ。」と…。

だから「備えなさい」と言うのです。主が今日帰って来られるとしたら、あなたの地上の生活が終わるとしたら、あなたの信仰者としての地上の生活は神に誉めていただけるものかどうかです。神が「よくやった！」と言ってくださるそんな人生を信仰者として生きたかどうかです。だから「備えなさい！」と言っているのです。

信仰者の皆さん、もしかすると皆さんは自分の不忠実さに対して嘆いているかもしれません。「ダメだな…」と思っているかもしれません。それなら、神が言われることに対して「主よ、私は従います。どうか助けてください。」と願うことです。私たちの信仰生活は、すべてを可能にくださる神に依存して生きるのです。それまでの生き方は自分の知恵や力に依存したものでした。だから、私たちはいつも自分の中で「できるか、できないか」を判断しているのです。神が言われたことに対して、先ず、自分の中で「できるかできないか」を判断して、無理なら「無理です」と言うのです。そうして、あなたの不信仰において神の働きをあなた自身が摘んでしまっているのです。私たちの信仰は、神だけが全能であり、神だけがどんなことでもお出来になる方だという信頼です。私たちは主が言われたことに対して「分かりました、主よ。どうぞ、そのみわざがなされますように」と主を信頼するのです。そのときに主が働くのです。

今日、私たちが見て来たのは「備えをする」ということです。イエスが帰って来られるからです。そのイエス・キリストにお会いするための備えが出来ているかどうかです。このみことばの警告は繰り返して「備えをしていない者たちがいる」ということです。クリスチャンとして振る舞っているけれど、救いを経験していない、そういう人たちがたくさんいると。だから、私たちも自分の信仰を吟味しなければいけません。本当に私は救いに与っているのか？と。主が私に対して「わたしはお前のことを知っている」と言われるのか？それとも「知らない」と言われるのか？

信仰者の皆さん、私たちがこうして新しい日を神からいただいているのは、神のために生きるためです。そのためにこの日をくださったのです。あなたは主にお会いする備えができていますか？

今日のレッスンは私たちに二つのことを教えてくれました。

- ・すべての罪人には「さばきへの備え」、すなわち「救い」が必要だということ
- ・すべてのクリスチャンには「清算への備え」、つまり、主への忠誠＝忠義が必要だということ

どうか、主にお会いする備えをもってこの日を歩んで行きましょう。救われていない人がもしいるなら、神は今日あなたを救いへと招いてくださっています。どうか、心からあなたの罪を悔い改めてイエス・キリストの救いをいただくことです。クリスチャンたち、目を覚まさないといけません。私たちは何のために生かされているのか？そのことをもって、あなたに託された賜物をしっかりと主のために使うことです。それが主があなたに命じておられることです。それこそが主にお会いする備えです。